

# 資源循環型社会への歩

二〇〇一年五月の食品リサイクル法（食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律）の施行から一年たった。ごみ減量・リサイクルを求めたこの法律への理解は徐々に進展し、最近では生ごみ処理機を導入する動きも活発になってきている。地球の負荷を軽減し、循環型社会をつくるには行政、企業、消費者が一体となった取り組みが必要だが、大分県津久見市は二〇〇〇年に「循環型社会形成推進基本法」が制定される以前から、自治体、企業、学校、市民が一体となって「ゼロエミッション地域づくり」を目指してきた。

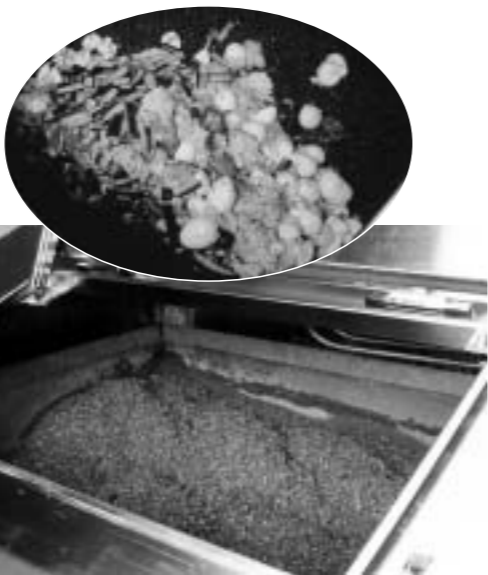
## 食品廃棄物を20%削減

年間五千万トといわれるわが国の一般廃棄物のなかで、二千万トが食品廃棄物。そのうち約半分が家庭のみで、あと半分が食品メーカー、流通、外食産業から排出される事業系のごみだといわれている。

食品廃棄物の処理は約九割（一九九六年推計）が焼却され、肥料化、飼料化などリサイクルされているのは一割弱にすぎない。ごみの最終処分場確保、焼却施設の新設は年々困難になっており、また焼却はダイオキシン、二酸化炭素の排出などのさまざまな問題も発生している。

## 先駆的なモデル地域に

大分県津久見市は、二〇〇〇年に循環型社会形成推進基本法が制定される以前から、積極的に循環型社会づくりに取り組んできた。「ゼロエミッション構想」の先駆的なモデル地域だとされる量を減少させるといえるだろう。



生ごみ投入直後（上）と処理6時間後

ゼロエミッションとは、その名の通り廃棄物を出さないということ。廃棄物の削減を進める一方、ある産業からの廃棄物を、他の産業の原料として活用しながら、全体として地域の廃棄物をゼロにしようという構想で、一九九四年、国連大学が提唱したものだ。

## 堆肥型から消滅型へ

津久見市では、現在、市内で回収された年間約六千五百トの可燃ごみは焼却せずに全部プラント工場で固形燃料（RDF）化して、全量、セメント工場（太平洋セメント津久見工場）で燃料として再利用されている。焼却灰はそのままセメントの原料にもなるので、同市の可燃ごみの処分物に

関係する近隣住民からのクレームも全くない」と言う。実際に毎日生ごみを処理機に投入する給食室の職員は「今までは週に二度しか生ごみを捨てるのができず、毎日大量に出る生ごみを新聞紙に包んで小分けして収集場に持ち込んでいた。処理機を使うようになってからは生ごみの処理が非常に楽になった」と喜ぶ。現在、同校では毎日、約二十キロの生ごみを消滅処理している。

「学校給食の場合はそうでもないが、料亭やレストランなど濃い調味料を使つた生ごみでつくつた堆肥は塩素が多く土壌を損なう場合がある。せつかく堆肥にしても使用を嫌う生産農家もある。またセメントの燃料・原料になる固形燃料も塩分を嫌う。都市部の生ごみ処理機は、これから消滅型に変わっていくのではないだろうか」（同市環境保全課）

津久見市では、現在、市内で回収された年間約六千五百トの可燃ごみは焼却せずに全部プラント工場で固形燃料（RDF）化して、全量、セメント工場（太平洋セメント津久見工場）で燃料として再利用されている。焼却灰はそのままセメントの原料にもなるので、同市の可燃ごみの処分物に

津久見市の学校給食はセンター方式ではなく、各学校で調理する単独校方式なので、食べ残しだけでなく調理ごみが大量に出る。毎日の生ごみ量は五百人規模の学校で二十キロから三十キロ。生ごみ処理機でできた堆肥（たいひ）は、津久見市内のみかん畑の肥料として利用されている。「みかんの名産地という津久見市ならではの条件があったから。それと学校が大量の生ごみを出していた

「海とみかんとセメントのまち・津久見」は、地域の特性をうまく生かし、ゼロエミッション構想の最先端を走っている。

## 効果大きい消臭消滅型処理機

類の土壌菌からなる「メデアムバイオ」という独自のバイオ製剤により、二時間から最長でも五日間で生ごみを水蒸気と炭酸ガスに分解し完全に消滅させる。独自のバイオ製剤なので、おいも出ない。生ごみを毎日投入して、一度の補充ですむうえ、

## バイオ製剤で生ごみを分解

くるコンポスト型と違って生ごみを完全に消滅させるので、処理物を回収したり運搬したりする手間が省け、処理機自体の容積も従来の三分の一ですむとい

## 「スーパーワイティ」ケミテックが開発

ケミテック（福岡県筑紫野市、山岡守社長、〇九二九一九二八五〇）が開発した生ごみ処理機「スーパーワイティ」は、バイオの力で生ごみを完全に分解してしまつ画期的な消臭消滅型処理機として注目を集めている。

この処理機は、野菜くず、残飯をはじめ卵・カニの殻やニワトリのだしガラなど台所から出る生ごみなら何でも分解が可能。二十一種



給食室に設置された生ごみ処理機（津久見市立第二中学校）

シオンである。また古紙等のリサイクル品は、すでに九一年から知的障害者通所授産施設（つばめ園）が市から全面委託を受け、市内の隅々まで収集。前年度実績は約千二百トにのぼっている。

灰を埋め立てようにも肝心の最終処理場のスペースがない。幸い津久見市は、固形燃料の利用先として市内にセメント工場がある。工場側もごみ固形燃料の利用には積極的だったので、思い切って固形燃料化に踏み切ることにした。



RDFの処理センター

「完全消化」されている。ごみ固形燃料はコンバクトで運搬しやすく、カオリーは石炭の約半分。セメント製造工程で千五百度の高熱で処理されるので、ダイオキシンが排出される心配はない。ダイオキシンが問題化する前に固形燃料化に踏み切つて本当によかった」（津久見市環境保全課）